

なくも ひろゆき
南雲 弘行

連合・事務局長

「働くことを 軸とする安心社会」を期して

明けましておめでとうございます。新春を迎え、皆様、十分にリフレッシュされたでしょうか。また、この年末年始もお仕事をされていた方々には、どこかで一息つくことができるよう、心よりお祈り申し上げます。

さて、去年は連合の事務局長に就任し、ようやく1年が経過しました。2009年9月の政権交代以降、連合は与党を応援する立場となり、従来の要求型の運動から協議・実現型の運動へと自己改革を迫られました。

こうした運動の質的な転換が求められる一方で、鳩山政権から菅政権への移行がなされるなど政局も安定せず、私たちは組織内外において大きな課題と対峙せざるを得ない、そのような1年間でした。

しかし、こうして旧年を振り返ると、私にはどうしても忘れられない調査が思い起されます。それは昨年9月に発表された厚生労働省による「労使コミュニケーション調査」です。

それによると、「労働組合を必要」と考えている労働者の割合が5年前の63%から54.5%へと、実に8.5%も減少していたのです。この結果は、私たち労働組合関係者を大きく落胆させました。

この5年間でみれば、労働に関するニュースは非常に厳しいものばかりでした。格差社会、ワーキングプア、派遣切り、ブラック会社など、労働関係を描写する言葉にはマイナスイメージのものばかりが目立ちました。賃上げはままならず、労働者への配分は低く抑

えられています。さらにリーマンショック以降は世界的な不況に陥り、今もデフレと円高が日本経済をむしばみ続けています。こうした状況を反映し、失業率も高止まり、新卒就職率は過去最低の水準にあります。

いずれの問題を見ても、今こそ労働組合の出番である。今最も必要とされるべき組織は労働組合である。私たちはそう自負してきました。しかし、同調査が付き付けた結果は、非常に厳しい内容でした。

この事実を私たちは真摯に受け止めなければなりません。しかし同時に、立ち止まっていることも許されません。5400万人を越える日本の雇用労働者の生活が安定しなければ、日本の未来に安心は訪れません。そのために、私たちは頑張るしかありません。

むしろ、労働組合離れともいえる現象の原因はどこにあるのか。私たちの主張に問題があるのか、あるいは私たちの運動のあり方に問題があるのか。改めて見つめ直すことが必要です。

かつて連合は「力と政策」というスローガンを掲げて誕生し、2009年には結成20周年を迎えました。そのような節目を迎え、私たちは運動の原点に立ち返り、連合がめざすべく社会像とは何なのか、昨年およそ1年間をかけて議論しました。

そうして、たどりついた結論、それが「働くことを軸とする安心社会」です。

「働くことを軸とする安心社会」とは、働くことに最も重要な価値を置き、誰もが公正



な労働条件のもと、多様な働き方を通じて社会に参加できる社会です。さらには、個々人が社会的・経済的に自立することを軸とし、相互に支え合い、自己実現に挑戦できるセーフティネットが組み込まれている参加型の社会をさします。

私たちは、誰もがいつでも働く機会、参加の場を得ることができる、そのような安心感こそが、人々の希望につながると考えます。しかし、こうした社会像や政策を実現するには、ただ思い焦がれるだけでは意味がありません。

連合は運動を推進する主体であり、まさに今問われるのは、「力と政策」でいえば「力」、すなわち実践力です。

この1年間、議論してきた「働くことを軸とする安心社会」という理念を実際の社会像として昇華させるために、私たちはあらゆる手段を講じ、この新年、がむしゃらに取り組みたいと考えています。

そして、いくら自分たちで正しいと信じた主張を声高に叫んでも、社会的に浸透させることが極めて難しいという事実を、私たちはすでに知っています。

コミュニケーションが多様化する現代社会において、私たちの行動スタイルも自ずと変化する必要に迫られています。

連合本部は昨年10月から、月1回の街宣行動を展開しています。これはとてもオーソドックスな取り組みではありますが、ときに街頭で声を張り上げるならば、ときにはネット

上でつぶやく。いわゆるツイッターを活用してみる。

大人向けに「働くことを軸とする安心社会」を考えるためのタウンミーティングを行えば、小学生向けには漫画で労働組合の役割を伝える。まだ、発刊前ではありますが、連合はこの4月新学期に向けて、小学生向けに労働組合を説明する漫画本を学研のひみつシリーズから発刊する予定です。

従来型のスタイルもあれば、新しいスタイルも試みる。硬軟合わせた、自由な発想での取り組みを心がけたいと思います。

そして、すでに目前にある2011春季生活闘争は、中小企業労働者はもちろん、正規労働者だけでなく、非正規労働者まで含めた「すべての働く者の処遇改善」にむけた闘いとして位置付けています。こうした目の前にある一つひとつの運動に新たなチャレンジを意識しながら、「働くことを軸とする安心社会」の実現に邁進していきたいと思ひます。

昨年の調査結果は私たちにとって、確かに厳しいものでした。しかし、早くも鬼に笑われることを承知で申し上げれば、来年の新春あいさつでは、労働調査協議会で行なった調査において、私たちの活動に目に見える成果があったとご挨拶させていただきたい、その様な思いで一杯です。そのためには、この1年をがむしゃらに頑張る、そう決意申し上げ、新年のご挨拶とさせていただきます。本年も変わらぬご支援、ご鞭撻のほど、よろしく御願ひいたします。